

CHAIR? GALLERY

名作椅子に見るリデザイン展

■期日：11月8日(火)～6月3日(日)

■開館時間：11:00～17:00(～4月)、
10:00～18:00(5月～)

■休館日：毎週月曜日、
12月30日(金)～1月4日(水)

■主催：旭川デザイン協議会、
織田コレクション協力会

■入場：無料

■趣旨：リデザインとは、自作、他作を問わず、過去にデザインされたモノの中に問題点、改善点を見出し、改めてデザインし直すことによって、より良いモノを創り出していこうとする行為です。本展示では織田コレクションの中から名作椅子に於けるリデザインをテーマにその実例を紹介します。



ASAHIKAWA DESIGN ASSOCIATION

旭川デザイン協議会

〒070-0030 旭川市宮下通11丁目 蔵田夢コレクション館内

Tel.0166-23-3000 Fax.0166-23-3005

E-mail ada@ada-jp.org

Hp <http://ada-jp.org/>

2011 Vol.24

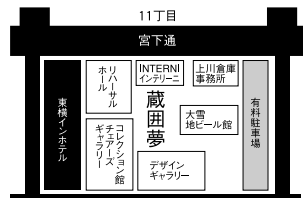
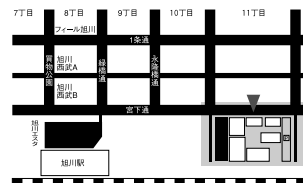
発行日/2011年12月1日

発行/旭川デザイン協議会

発行責任者/小林 謙

編集/広報事業部

印刷所/株式会社製版旭川支社



ASAHIKAWA DESIGN ASSOCIATION
Design News 43° vol.24



ONE EARTH.
ONE LIFE.

CHANGE THE WORLD FROM JAPAN.

三都市+ONEデザイン交流会議in旭川2011

旭川デザイン協議会 会長 小林 謙

開催期間/2011.9.17~18

デザイン交流会議は、昨年の帯広に続き、今年は旭川で9月17・18日の両日開催されました。基本テーマを「旭川が育てるデザインの可能性」とし、初日は、来年から学生募集を停止する東海大学芸術工学部のキャンパスで行いました。

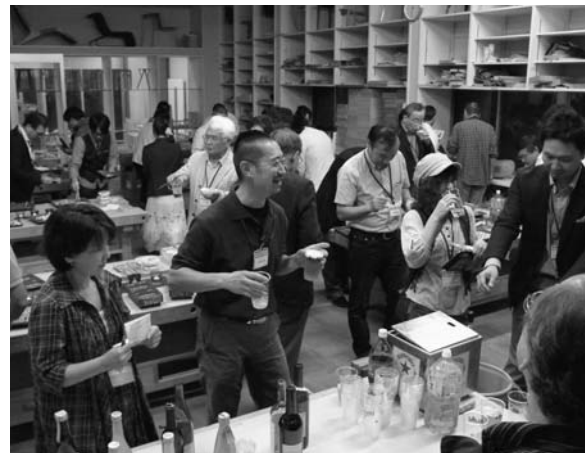
各都市が「地域のデザイン史をつくろう」というプレゼンテーションを行うデザイン会議から始まり、異なった地域・分野で活躍している同校の卒業生をパネラーに迎え、初めて市民参加とした公開シンポジウム「わたしはここでスタートした」を矢野副会長の司会で開催。その後、学生の作品や仕掛品の並んでいる同校の工房に移動し、大谷副会長の企画運営による懇親会「工房ビュッフェ・パーティ」を開催しました。翌日は旭川市のマイクロバスにより北彩都周辺の見学会、ギャラリーに戻って伊藤専務による「旭川しょうゆ焼きそば」の試食会、そして開催中の北の恵み食べマルシェへ参加と、盛りだくさんの内容で、すこし疲れたけれど、充実した2日間となりました。



大学の閉校に見られるような、社会変化の大きな波が現実的な事として地方に降りかかっています。ADAも今年は新役員体制となり、地域を見据え、北海道オリジナルな造形や産業デザインを盛り上げる活動を展開したいものです。今回取り上げた、デザインが地域の特色を表現し高めてきた足跡である「地域のデザイン史」、地域全体から感化されることで実力を育てていった「旭川出身」のデザイナーたちの熱い発言を聴き、地域に密着したデザインとそのためのひとつの大切さを考えさせられました。

今後の会議予定は、次年度予定の函館デザイン協議会が、再来年(2013年)会の設立20年の記念行事にこの会議を組み込みたい意向があることから、来年は札幌開催の可能性を検討することになりました。

何度も会議を開き実施に尽力された連携事業部など実行委員の皆様、会場提供していただいた東海大学、旭川市に感謝します。遠方から参加していただいた須長さんを初めとするパネラーの皆様、なによりいつも刺激的な活動のヒントを頂いている帯広・函館そしてプラス1の皆様から感謝します。



「地域デザイン史をつくろう」が今年のデザイン会議のテーマ

旭川デザイン協議会顧問 北のデザイン研究所 澁谷邦男

参加者/30名



旭川が主催する今回の三都市+ONEデザイン交流会議の一日目主要行事のひとつであるデザイン会議は、旭川デザイン協議会(以下ADA)が昨年編纂した「旭川デザイン史」が多くの反響を呼んだことから「地域デザイン史をつくろう」をテーマに据えました。

「旭川デザイン史」は、2010年初め、まずはADA設立後十年の記録整理をとの動機で始めましたが、協議会の設立経緯を追って時間を遡るうちに瞬間に一世紀前に到達し、この際旭川のデザインの歴史を俯瞰してみようとその編纂に取り組み、同年10月完成したものです。

一協議会の歴史から地域のデザイン史への発展的移行は即決でした。なぜならばこれまでほとんど目にすることがない、いや今回新たに生まれたデザインのキーワードといえる「地域デザイン史」は、よくよく考えますとこの時期の旭川にとって、編纂の意義が極めて大きい、と気付いたからです。

歴史は多くを教えてくれる…。昨今の社会経済環境の大きな変化はその影響がデザインの世界にまで波及し、旭川では東海大学の撤退がそれに輪をかける今日の状況に、従来の思考の延長線上ではこの先悲観的なものしか見えず、では新たなこれからの方向を見出すにはどうすればよいのか模索する中、いにしえから言い伝えは、格別の重みを持って響いたのです。

旭川デザイン史の編纂を通して見えてきた今後の取組むべき方向は、ふたつ。農業を含めた地域産業と生活の有機的結合

で独自の地域デザインを積極的に進めること。それと人材育成および教育研究の知的集合機関を自前で持つことです。これらは昨年からの市民の間で始まった公立ものづくり大学設置運動の目ざすものと、まさに軌を同じくするものです。



旭川デザイン協議会 顧問 澁谷邦男氏

三都市+ONEデザイン交流会議冒頭の会議セッションでは、事前のこちらからの要請に基づく将来各地域のデザイン史、さらには北海道デザイン史編纂の足がかりとなると思われるトピックスのプレゼンテーションが行われました。

帯広は、金澤和彦会長の司会で中岡奈津美さんが遥か縄文時代に遡り、次いで近代の六花亭のパッケージの由来を、吉野隆幸さんが風土と建築、農業地域の生活空間を追求してきた活動の経過を紹介。函館は、渡辺譲治会長が観光ポスターデザインの変遷を、大塚直記さんが少年倶楽部の挿絵などで知られ彫刻家でもある梁川剛一を取上げました。札幌は、後藤精二会長が栗谷川健一の一連のポスターデザインを紹介、後段で新進デザイナーの最近の仕事と対比しました。旭川は、澁谷邦男が旭川デザイン史の始まりについての考察を述べ、今後各地で機会を捉えて地域デザイン史をつくりましょう、と呼びかけました。

四地域のプレゼンテーションは極めて中身が深く濃い内容で、用意した時間が少なかったのが悔やまれましたが、今後内容の発展が期待される会議となりました。



とち帯広デザイン振興協議会 会長 金澤和彦氏(右)
とち帯広デザイン振興協議会 幹事 吉野隆幸氏(左)



函館デザイン協議会 会長 渡辺譲治氏(左)
函館デザイン協議会 事務局長 大塚直記氏(右)



北海道デザイン協議会 会長 後藤精二氏

「わたしはここでスタートした」

三都市+ONEデザイン交流会議in旭川2011シンポジウム
旭川デザイン協議会 副会長 やはずのよしゆき

参加者/80名

産官学がうまく協力し合いながら地域のデザインシーンをつ
くってきた旭川。その旭川において、惜しくも数年後廃止され
ることとなる東海大学のキャンパスを会場に、秋真っ盛り3連
休の初日、三都市+ONEデザイン交流会議のシンポジウム「わ
たしはここでスタートした」を一般の方や学生も交え盛大に(?)
開催。世界に広く地域に深く活動している3名の卒業生をパネ
リストとして迎え、地域に密着してきたデザイン教育をふりかえ
りながら、これから特色のある地域を担う、次の創造的人材の
育成をどう生み出していくのかなど、それぞれの地域の明日を
グローバルとローカルの視点から探る公開シンポジウムとなり
ました。

卒業生のパネリストは、スウェーデ
ンを拠点に世界を活動の場とし、
2009年に「NEWTON」をストック
ホルム家具見本市ミラノサローネで
発表すると、北欧4カ国の最優秀成型
合板製家具賞 NORDIC DESIGN
AWARD、2010年にはELLE DECO SWEDEN / Year of
2010を受賞。現在は軽井沢にSunaga DesignとShopを持
つ、家具デザイナーの須長檀さん。



札幌を拠点に90年代より全国のBEAMSの店舗デザインを
担当し、現在は店舗設計の他、webショップ「デザインストア」を
立ち上げオリジナル家具を紹介。さら
には設計事務所とコラボレーションし
た子供用家具やカフェのオリジナル
アイテムの提案など、プロダクト事業
にも力を入れ、幅広く活動するインテ
リアデザイナーの平尾哲さん。

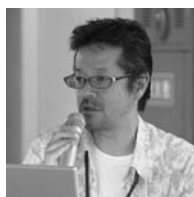


そして、地元旭川からは、飲食店の
サインやパンフレットからポスターなど、
さまざまグラフィックデザインの仕事
をこなし、最近では中部国際空港セン
トリア「大雪おみやげ博」、旭川買物
公園の情報誌「hoccol」、「北の恵み
食べマルシェ」2010、2011のイラストを担当。2010年高
砂酒造ワンカップ「純米酒すZOOっと旭山」では、日本ガラス
びん協会「ガラスびんアワード」2010根本美緒賞を受賞した
「よつば舎」あべみちこさん。

パネリスト達からは、それぞれのフィールドとデザインを通し
た視点で、これからの時代、デザイナーにどんなことが求めら
れるかなど、たくさんの素晴らしい話をお聞かせいただきました。

今回のシンポジウムで今後の旭川のデザインシーンにおいて、
どのような人材教育ができるかなど、明確な答えは見つかりま
せんでしたが、グローバルでも、ローカルでも、ものづくりをベー
スとして、地域の発展のために特色のあるデザイナーを育てる
ということは、その土地を愛し、さまざまな経験を積める環境
そのものを育てること。そういう意識を持った人が、一人でも
多くいなければ、地域を担うデザイナーは育たないという方向
性だけは見えたのかも知れません。

これからは、もっともっと好奇心と向上心を持つことと、さら
に新しいものを取り入れながら、もの
づくりスピリッツの継承ができる場を、
ひとつでも多くつくっていくことが大
切なんだと強く感じました。
さあ。
がんばろうっ!!あさひかわ。



「三都市交流懇親会/北彩都めぐり・マルシェ」

旭川デザイン協議会 副会長 大谷 薫

参加者/懇親会 47名、北彩都めぐり 22名

今年の三都市交流懇親会は小林会長の発案で東海大学の工
房が会場となりました。

数年後の札幌校との統合が決まっている東海大学ですが、立
派な施設である工房の今後の利用はどうなるのか。三都市の会
員さんもきつと胸の内でそう感じていたのではないのでしょうか。

それはさておき、日が暮れるのが少し早くなってきた時期、
ウエルカムキャンドルがゲストの皆様をお出迎えし、皆さんに
楽しんで頂いたお料理は「本草」という薬膳料理のお店に
デリバリーをお願いしました。また、各都市にお越し頂きました
おみやげをもとにそのおみやげの争奪じゃんけん大会など、懇親
会は盛況となりました。



翌日は、バスで北彩都の開発場所をぐるりと周る途中でデザ
イントークショップにお立ち寄り頂き、皆様にショッピングを楽し
んで頂きました。そして、大谷会員(わたし)をピックアップして
いただきギャラリーに集合しました。

当日は、あさひかわ食べマルシェの開催日です。が、その前
に伊藤専務理事自ら、あさひかわ名物米粉を使った麺が美味し
いと評判のしょうゆ焼きそばを作っていました。その美味
しさにおかわり続出でありました。



旭川しょうゆ焼きそば

各都市からおみやげが出され...



...争奪じゃんけん大会!あっちむいてホイ!



懇親会二次会にて

事務局のつぶやき

三都市会議1日目、懇親会も無事終わり、みなさん笑顔で二次会場へ。
よかったよかった♪
工房の後片付けも終わり、さあ、事務局へ戻りますかあ、と車をバックさせたら
「ポコン」と嫌な音...えっ!?
工房前にあったジャンプ台?に命中です。
ホッとしたのも束の間、心も車も凹みました。。

aadc展2011

開催期間／2011.8.9～21
来場者数／531名

メッセージTシャツデザイン展

旭川広告デザイン協議会 イベント交流懇親事業部 馬留康行

2011年8月9日(火)から20日(土)の間、デザインギャラリーにて開催しましたaadc展2011「メッセージTシャツデザイン展」は、「ココロをカタチに」をテーマに、日頃、大切な人や物に対して抱いているメッセージを、生活の中で身近なものであるTシャツを媒体にして、ロープを張り巡らせた会場に、作品を洗濯バサミで吊るすポスター展というかたちで、展示しました。Tシャツを媒体に選んだ理由には、メッセージを街へ、外へ発信したい。それを風化させたくない。という思いも込められています。



例年のaadc展では、aadc会員作品のみの展示でしたが、今年は、デザイン・美術に携わる、aadc会員以外の方や、8月20日に開催されましたデザインキャンプのゲストからも作品を募集した結果、総作品展数は131点にのびりました。

各作品から発信されたメッセージは、3月11日に起きた東日本大震災を受けてのものや、生活の中で、言うのは簡単な事、またその逆の事、ウットに富んだもの等、多岐にわたりました。

共通するメッセージは、問題提起をした上で、地域や社会を、元気に、明るくし、前向きにしたいという目的のものが多く、これは、Tシャツという身にまとうアイテムの性格の、また、この時代、クリエイターに求められる重要な役割のひとつであると思います。

普段、Tシャツデザイン以外の制作が仕事であるクリエイターも多いなか、シルクスクリン印刷を想定した制限の多い作品制作のルールや、会員以外の方の作品も含めた全作品を対象として、開期中、ご来場者による人気作品投票アンケートを実施し、上位作品を実際にTシャツ化する企画は、各クリエイターの新しいクリエイティブな発想への、挑戦の場ともなりました。

結果は、上位すべて、aadc会員の作品が受賞となりましたが、一般の方からも作品を募集した事によって、今後の旭川の、また、旭川の業界、aadcの更なる活性化につながればと考えます。

ASAHIKAWA DESIGN CAMP 2011 SUMMER

旭川広告デザイン協議会 研修事業部 安達鈴香

2011年8月20日(土)、旭川デザインギャラリーにて「デザインキャンプ 2011 サマー」を開催いたしました。若いクリエイターを元気にしようと2009年から始まったこの企画も4回目の開催となり、会場はほぼ満席。学生を含めた若い世代にも多く集まっていただきました。

今回のテーマは「ココロをカタチに」。どんな広告にも必ず「メッセージ」があります。普段の仕事に、どのようなモチベーションで取り組んでいるのか。どのようにメッセージを込めているのか。パネリストに札幌から前田麦さん(イラストレーター)、yukkyさん(イラストレーター)、旭川から今津秀邦さん(aadc会員)の3人を迎え、コーディネーターの竹田貴治さん(aadc副会長)と共に、それぞれ異なる立場から仕事の現場や経験を通じた熱いトークをしていただきました。

はじめに、ゲストが今まで取り組んできた仕事を含めた自己紹介からトークがスタートしました。札幌、旭川の第一線で活躍中のクリエイターの話に、会場の人たちは熱心に耳を傾けていました。

前田さんの代表作「リボネシア」やCMで話題となったyukkyさんの「AC あいさつの魔法」、今津さんの「旭山動物園物語ペンギンが空を飛ぶ」の制作秘話には、クリエイターとしての姿勢や心構え、作品に込めたメッセージなど、分かりやすく、楽しく話してくださいました。

トーク終了後には、同会場でサマーパーティーも開催。ゲストとの情報交換をはじめ、若い世代同士の交流も盛んに行われ、和やかなムードの中、今年のデザインキャンプは終了いたしました。

今回も、クリエイターの皆さんのアツいパワーを感じる素敵なイベントになりました。今後も会の外へのアピールを続け、旭川の広告デザインの重要性とデザインに携わる人々の意識を高めて、旭川を盛り上げたいと思います。



JAGDA北海道ポスター展2010 My Heart

JAGDA北海道地区 幹事 伊藤友一

開催期間／2011.4.22～5.1
来場者数／213名

毎年恒例となっているJAGDAポスター展の北海道巡回展です。今回のテーマはMy Heart。このテーマのコンセプトをJAGDA北海道運営委員の中西氏がコメントしていますのでご紹介します。



My heartです。私の心です。口にする、ちよっと照れくさいテーマです。ですが、敢えてそれをグラフィックデザインで表現します。マイ・ハートなんて聞こえはファンシーですが、本当は色もカタチもない、でも人間にとっていちばん大切なものという、非常に厄介な代物に挑戦です。わたしたちグラフィックデザインに関わるものは、日常の仕事において、依頼主の要望など具体的な条件を視覚化していますが、果たして、この「自分の心」という最も身近で困難なお題にはどんな回答をするのでしょうか。(社)日本グラフィックデザイナー協会 北海道地区担当運営委員 中西「サビ」一志

ということで今年も無事に旭川展を開催することができました。まず、JAGDAという団体は日本グラフィックデザイナー協会という社団法人で、1978年、戦後日本のグラフィックデザインの礎を築き東京オリンピックのポスターをはじめ数々の名作を残した故、亀倉雄策らを中心に設立され、現在会員約2,800名の会員を擁するアジア最大のデザイン組織です。

現在は勝井三雄会長以下、原研哉、松永真、浅葉克己、上條喬久、長友啓典、佐藤卓など日本を代表するデザイナーが理事会を組織しています。 <http://www.jagda.org/>

北海道地域においては道央と道東の二つの支部があり約100名の会員が所属しています。現在の北海道地区代表幹事は今年の三都市デザイン会議にも出席していただいた、佐藤正人氏です。また、運営委員として東京本部とのパイプ役を果たしてくれているのがワビサビというユニット名でおなじみの工藤氏と中西氏です。

このJAGDA北海道主催のポスター展が毎年札幌大通り美術館にて秋に開催され、その巡回展として旭川はデザインギャラリーにおいてADA自主企画事業の一つとして開催されているものです。グラフィックデザイナーの力の見せ所であるB1ポスターという形で、テーマに沿ったポスターを集めた展示会は、毎年見応えのあるものとなっています。

グラフィックデザインを生業としている方、JAGDAの新会員へチャレンジしてみませんか?

第43回旭川工芸デザイン協会展

旭川工芸デザイン協会 会長 中井啓二郎

開催期間／2011.6.14～26
来場者数／1,583名

毎年地元旭川と他の地域での展示会を続けてきて22年目。今回は3年ごとの国際家具デザインフェアの中での開催で、多くの入場者となりました。テーマを「サポートするクラフト」とし、「ほんの少し支えになったり、役に立ったり」する作品と通常の作品、更に作品招待作家展は今までの他地域のクラフト作家の招待展示とちよっと違い、旭川近郊で制作されている工房宮地のパーキンソン病患者用椅子やアルキミアと工房ぞうさんの障害者用車椅子、COM泉屋のスポーツ用車椅子などの展示をしました。

恒例の講演会には工房ぞうさん・松下久志さんによる重度の障害を持った人用の車椅子の製作過程の解説、COM泉屋・泉



谷昌洋さんは車椅子バスケットボール、外用車椅子の開発や障害者との関わりなどについて熱く語られました。

当会での「サポートするクラフト」作品では、大門さんは木製の脚に細かい切り込みを入れることでスプリ



ングのようなクッション性を付加したスツール、菅井さんは、余分な醤油やドレッシングを取らないように工夫したガラス皿、吉村さんの畳とクッションを組み合わせたソファ、大谷岬子さんの染色スリング(抱っこヒモ)、吉岡さんの持ち手の大きなお盆、桑原さんは短材端材を引き出し前板にし、エコを考慮したチェスト・・・私は座面の上下(座高25～65cm)する小椅子などを出品しました。

当会は20年以上の歴史を重ねてきましたが、そろそろ若手グループの追い越しが心配になってきましたが、まだまだ負けられません。頑張って次回につなげましょう。